

教育課程編成委員会 第1回議事録

日時：2015年8月28日(金) 19時～20時半

場所：15 教室

出席者： 白井幸久氏 三沢幸史氏 望月太敦氏 小檜山修平氏
八尾 勝氏 上松 剛氏
倉持有希子氏（家族のご不幸で急きょ欠席、代理は渡邊義昭が務めた）
列席者： 中浦俊一郎氏 渡邊義昭氏 林 恵子氏

I. 聖書日課 マルコによる福音書2章22節 八尾校長

聖書を朗読後、聖書日課の説明があった。下記の通りである。

聖書日課とは世界中のYMCAとYWCAでその日に読む聖書の箇所が決められており、日々の糧となっている。本日は外部の方々にお集まりいただいている会議のためお祈りは省略させていただきます。

II. 議事

議事に入る前に校長より昨年度から今日までの「教育課程編成委員会」の流れの説明があった。下記の通りである。

職業実践専門課程には全国の専門学校約25%が認定された。

「教育課程編成委員会」は「職業実践専門課程」として認定されるための要件のひとつとして1昨年にスタートしたが、例年、短い期間の中で委員の皆様にご協力いただき感謝している。昨年のお話し合いの中では、本校の教育課程への貴重なアドバイスをいただいた。キリスト教について、実習スタイルについて、卒業生の活用について等である。今年度は引き続き、介護福祉科、作業療法学科の教育課程へのご意見を頂戴したい。

石巻ワークキャンプの報告会に専門学校新聞社が取材に来て下さって9月号に取り上げてくれた。記事もコピーしてあるので資料をご参照いただきたい。

1. 委員会の進め方の説明

八尾校長よりアジェンダに従って委員会の進め方と資料の確認がされた。

2. 委員自己紹介

出席委員および列席者、陪席者が自己紹介を行った。

三沢氏 地域連携がかなり話題となっている。即戦力としてどう現場に送り込むか

小檜山氏 現場の意見を反映したい

上松氏 どうやって教えるか？信頼関係・・・具体的にどうするかを考え続けている

中浦氏 教員になって3年目になった。授業の効果を気にして今後も頑張っていきたい

林氏 8月19日ボランティアに行った。今年はグループホームに行った（2年前に行っ

たつながり) 学ぶことがあった→YMCA で行っていくことが大切

渡邊氏 学力が足りないところで入学している学生への対応

望月氏 10月から重心の立ち上げ。地域連携は考えていきたい。児童福祉の分野でも活躍している

白井氏 東京都介護福祉士会 毎週研修を行っている。会員を増やすことが大きな課題
高齢者を対象にすることが多いが障害者関係の研修も進めていきたい。参加者が少なく閑古鳥が鳴いている状況である。

3. 委員長（議長）選出

白井氏を八尾校長が推薦。全員一致で決定。

白井氏よりご挨拶をいただき、議事に移った。

部会に分かれ、8時15分まで（約1時間）それぞれの学科で話し合いを行うこととなった。

4. 部会に移動

介護福祉科の部会：白井氏、望月氏、渡邊氏

作業療法学科の部会：三沢氏、小檜山氏、上松氏、中浦氏

それぞれの学科長がはじめに2015年度の学科のカリキュラム全体の姿の説明と今年度の工夫や力をいれている部分の説明を行った。その後、委員から意見、質問を交換しながら話し合いを進めていった。

5. 部会報告

（それぞれの部会の記録は別紙の通りである。より詳細が記録されている。）

●介護福祉科 渡邊氏より報告がされた。

これまでの教科課程編成委員会介護福祉科部会で指摘されてきた、YMCAらしさ（ボランティアやYMCAについての理解）に関して、1・2年次の学習支援演習Ⅰの取り組みについて説明を行った。

YMCAらしさを出したほうがいい

ボランティアの報告会

今後に向けて

介護福祉士の幅

障害の分野を学ぶ（療育の視点）

在宅介護について

実習先は1箇所しかない

小規模多機能など様々な実習先もあっていいのでは？

シラバスに関して・・・工夫されているが国家試験に向けてさらに充実してほしい

●作業療法学科 上松氏より次のように報告がされた。

臨床現場で通用する作業療法士を育てていくという目標に沿って、今年度は全体の流れを確認するためにカリキュラムマップを作成している

カリキュラムに関しては構成の見直し

学生にとってもカリキュラムが見える化する→カリキュラムマップ

実習を落とす学生も

実習指導者に丸投げしている現状

→実習指導者会議にてこちらの思いを丁寧に伝え、欠席したところは出向いている

教育の内容

学科内で内容を視覚化して共有する

カリキュラムマップ

学科目標の下位項目を作っている

課題として

主体的に動けない・・・→学習支援、ノートの取り方など

今日の話の中で・・・

地域の中で作業療法士がどういう風に立ち位置を持ってやっていくか

MTDLP（*）を使っていきたい

→科目のパーツ自体を考えていくべきと考えている

→実際に使うこともそうだが、それをどのように他職種と連携していくか、共有していくか

→どのように学習に入れていくかを考えていかなければいけない。

*MTDLPとは、Management Tool for Daily Life Performance の略で、生活行為向上マネジメント

次回の委員会日程

2015年9月28日（金）19時～

記録 渡邊義昭・中浦俊一郎

教育課程編成委員会

2015年8月28日

19:15～20:15

介護福祉科 部会 記録

出席者： 白井幸久氏 望月太敦氏 渡邊義昭氏（司会進行）

1. 教科の概要について説明 学科長代理として渡邊義昭氏

これまでの教育課程編成委員会介護福祉科部会で指摘されてきた、YMCA らしさ（ボランティアやYMCA についての理解）に関して、1・2年次の学習支援演習Ⅰの取り組みについて説明を行った。具体的には、夏休み前に「ボランティア実践」に関するコマを設定し、本校が2011年度より実施している「石巻ワークキャンプ」のボランティア参加への促しや、夏休み明けのボランティア報告会の実施状況について説明をした。「石巻ワークキャンプ」については、参加学生6名中介護福祉科1年生が5名参加するなど積極的な参加姿勢が見られたことを報告した。また、ボランティア報告会では、介護福祉科1・2年生と作業療法学科1・2年生の全学生が参加した。

また、12月のクリスマス礼拝の前にYMCA 設立の目的や現在の活動を説明する場を設け、学生の意識を高める取り組みを行っている。

共通試験対策についても、将来の国家試験化を見据えた受験対策実施状況について説明をした。特に、学生が主体的に学ぶための委員会を設け学習意欲を高める取り組みや、後期の授業の中で共通試験対策を設定するなど教科概要の科目の内容についても説明をした。

「いのち演習」では、幅広い知識や介護福祉士として「いのち（死）」と向き合わざるを得ない中で、より深く介護福祉士としての素地を高めるために外部の講師を招き授業を実施していることを説明した。

全10回の授業の中で、「カルトの世界」、「いのちの諸相」、「ホームレスのターミナル」、「四国遍路をする人たち」、「日本人の過ち =ハンセン病隔離の現場より=」、「生命保険とは(60分) / 横田めぐみさんを学ぶ (DVD)」、「介助犬 =実際のデモも用いて=」、「精神疾患と共に生きる事」、「役職の卒業生」、「音楽の力 =童謡療法= 」などを実施した。

特に難しい内容に関して、より理解を深められるように学習支援演習などでテーマに関する事前学習をおこない導入とした。

卒業生の話聞く回では、本委員会委員の望月太敦氏に対応していただいた。

昨年度からカリキュラム化された、医療的ケアに関する科目も1年次は2年目の開講になっている。

本年度2年生の授業は1月2月に集中的に演習を実施する予定。

2. 質疑応答とディスカッション

望月氏 介護職の幅の広がりについて、これまで高齢者がカリキュラムの主要な部分を占めて

いるが、障害の領域や障害児の「療育」の視点に関する取り組みについて知りたい。障害児者の施設の就職を目指す学生にとって、発達に関する分野の理解が大切であり、現在、障害児の通所施設の立ち上げを法人内で担当しているが、領域の違いで苦労している。

渡邊氏 現在のカリキュラムでは、障害に関する領域として2年次に「障害の理解Ⅰ・Ⅱ」として60時間の配置を行っている。授業内では、障害に対する理解として、歴史やコミュニケーションの取り方、自立支援に向けた介護の視点、身体・難病・精神・発達と領域別の介護の留意点などを学んでいるが、「療育」に関する内容は十分とは言えない。

また、関連領域として「発達と老化の理解」「こころとからだのしくみ」や「人間の尊厳と自立」の中で取り上げられる内容も含まれているのが現状である。

白井氏 介護福祉士の活躍の場として、介護保険の計画では地域包括ケアに伴う在宅ケアに向けてシフトされているが、実習の在り方やカリキュラムでどのように対応しているのか。

渡邊氏 現在の実習のカリキュラムでは、1年時の実習先として厚生労働省から示されている「実習施設・事業等（Ⅰ）」の実習先として、「利用者の暮らしや住まい等の日常生活の理解や多様な介護サービスの理解を行うことができるよう、利用者の生活の場として、小規模多機能型居宅介護事業、認知症対応型老人共同生活援助事業等を始めとして、居宅サービスを中心とする多様な介護現場を確保する（略）」と示されており、本学科としても、デイサービス、デイケア、グループホーム、在宅、障害児者通所施設等の実習先を確保しているが、在宅の実習先に関しては受け入れて頂ける事業者の数だけでなく利用者本人や家族の理解を得なければならないため実習先を増やすことが難しい。

また、地域の視点を取り入れた授業として「介護の基本Ⅵ」の中で、新宿区の戸山団地をケース事例として、実地調査を基に地域の福祉ニーズや地域福祉の視点を取り入れた授業を展開し、地域における介護問題を学ぶ機会を設けている。

在宅ケアに関連している授業として「生活支援技術8（家事）」、「家政学実習（栄養・調理）」を2年次に実施している。

3. 現場から学校に期待するところ および 4. 教育課程へのディスカッション

望月氏 介護福祉士として職域の広がりがあり、障害児者施設であっても介護福祉士の配置加算がある。養成校として「障害児者」へ関心を持ってもらえる「たね」を蒔く視点を持っていただきたい。

白井氏 カリキュラムの配置や授業内容の取り組みなど教科概要から、授業内容も明確で多くの工夫がなされていると読み取れる。「いのち演習」や「学習支援演習」など、介護福祉士の基本を支える考えや取り組みが実践できていると思う。また「家政学実習」

を科目領域「人間と社会」の中に配置するなど工夫が見られる。

5. まとめ

今回の部会では、本学科の取り組みに対して、委員各位より一定の評価を頂いた。今後の課題として、介護福祉士の役割の幅広がり障害の領域であったり介護保険計画で示されている地域包括ケアシステムなどの考え方を理解できる多様な人材育成が現場で求められる、今回の部会では議論を深めることができなかつたが、医療的ケアの取り組みについても介護福祉士の役割の広がりとして考えていかなければならない。学校の役割として、そういった多様な学びの中で「たね」を蒔く取り組みをさらに充実しなければならぬと、委員の先生方より示唆を受けることができた。

以上

教育課程編成委員会

2015年8月28日

19:15～20:15

作業療法学科 部会 記録

出席者： 三沢幸史氏、 小檜山修平氏、 上松 剛氏（進行）、 中浦俊一郎氏（記録）

1. 前回トピックとして挙げて頂いた内容についての経過報告

学科長

○カリキュラム

- ・ 全体の流れを確認しようとカリキュラムマップを作成している
- ・ 一般教養を3年に移すというアイデアは実習や国試対策等あり、やや難しいと考えているか？
- ・ 研究法、病院との連携において現場のOTに学校に来てもらうなど外の風を入れるようにしている
- ・ 三沢氏がおっしゃっていた連携についても考えていくべきであり、カリキュラムの中にも入れ込んでいく必要性は考えている

○実習

- ・ CCSのアイデアに関しては、実習指導者の教育も考えていく必要があり、現状指導者会議にて学校側の思いを丁寧に伝えるようにし、いらっしゃらなかったところには電話をして実際に訪問して説明している
- ・ 実習で失敗しても再チャレンジする環境は以前よりも柔軟に対応できていると思うが、ある程度の規定はあるためケースバイケースで考えている

○リーズニング

- ・ アクティブラーニングの導入

○教育内容について

- ・ 実技については力を入れており、それぞれの教員にて意識を高く持ってやっている
- ・ 学科目標として「学生に求める像」を掲げているが、その下位項目について学科全体で考えており、学生と教員にて何が求められ、何を求めているかについて視覚化しようとしている
- ・ 研究授業もやり始めており、今後継続していく方針である

○学生について

- ・ 主体的に考え、動ける学生を育てたいと考えている。そのために介護科に習い、「学習支援」という科目を設定し、授業に取り組みやすい環境を作ろうとしている
- ・ 根性論の限界を感じている

2. 質疑応答とディスカッション（今後の課題）

一同

三沢氏 様々な取り組みに関して頑張っているのではないかと・・・

上松氏 現場の風を入れる事ですぐに学生には入っていく。こちらも気づかされる事が多々あった

- 三沢氏 経験年数を悩んだ（現場の OT が授業に参加するにあたり）
意欲のあるスタッフ 3、4年目のスタッフ
学生とそんなに離れていないスタッフ
ちょうどよかったと思っている
- 上松氏 学生からあまり離れていないというのがよかったかもしれない
- 上松氏 生活行為向上マネジメントも授業に入れていかなければいけない。
ただ知識を伝えるだけではなく、これをうまく使うためには・・・などより使えるようにしなければいけない科目としても必要か？
- 三沢氏 作業療法の基本的な考えを一般化しただけ
これを他職種と共有して作業療法のいい部分を一緒に実践していく
そして連携していくことが重要
例えば通所の中で実際にケアさんが使っていくことまで考えていく必要がある。
- 上松氏 ツールを使用し、やり方を覚えるのはそんなに難しくないが・・・
OTは何をする職種なのか？という疑問はいつまでも残る
- 小檜山氏 作業療法の内容を伝えるためのツールにもなる
何でも屋さんというイメージ、下請けというイメージが拭えない
- 三沢氏 医療の場面で作業療法士が他職種の中で認められているかどうかは疑問であるという話もあるが、そんなことはない・・・
今年の春の慢性期医療学会にて・・・MTDLPについて地域包括ケア会長は地域での会議が盛り上がっていい！と話していた
スタッフの視点が変わって会議が盛り上がったとの話があった
説明しなくても MTDLP を基にして話せばいいということに気づいた
- 小檜山氏 学生の理解という点で考えても説明しやすいツールなのではないか？
リーズニングにつながるのではないか？
- 上松氏 訪問で ST が入ったケースで文章にして申し送られることがあった
専門家の目で評価してペーパーになっている
わかってもらいたいときにペーパーであると分かりやすい
- 三沢氏 ある学校のオープンキャンパスにて
全体に作業療法士を説明するのは難しい
対個人に話すと話が入りやすかった（多少長い時間関わる必要がある）
- 小檜山氏 定義が様々だから
- 三沢氏 様々な専門職、家族などそれぞれに理解してもらうことは難しい
しかし、このような苦労を経験することはいいと思う
- 小檜山氏 訪問では・・・トータル的に関わる必要がある
リハビリのイメージがあり、OT を前面に出せないこともある
少しずつ OT を伝えていくと伝わっていく
- 三沢氏 模擬的なものでもいいから、ケアマネジャーなどの擬似的に職種を作って、
そういう人に自己紹介する機会もあってもいいか？

介護予防事業においては OT、PT の区別がないという話も多い

東京都からも医師会からも OT も PT もいないという話も出てくるかもしれない。

やっていることは同じかもしれないけどその中に本質的なものが隠れている

説明できないと知らないという話も出てくる可能性もある

OT 協会も説明出来るものがないため、協会も変えようとしている

わからないなりに説明をする機会は仕事をするようになってからも生きてくるのではないか

小檜山氏 WFOT の定義を使えるのではないかと。収まりがよかった経験がある

三沢氏 様々な国々を参考にしようとしている

上松氏 概論で作業療法を説明するという授業もある

やっていることが同じだから

身障系でも作業を使うという頭がない

患者さんがこれをやりたいということに向き合える

ただ、これをやりたいと言わない人にどうするか？

心と体を同等に扱うという作業療法

もう少し科目も考えていくべきか？

三沢氏 町田市の懇親会

訪問の OT、PT、マッサージなどの集まり

PT も「活動」と「参加」といっている

マッサージ師も同様のことを言い始めている

専門性の中で活動と参加について言うようになっていく

やれるというところでいくとみんな同じになってしまう。

単価が安いマッサージに流れてしまう可能性もある。

小檜山氏 OT だからこそ出来るものを提示する必要がある

三沢氏 やる過程の中でどのような方向に持っていくのか？という基本的なことを大事にしていかな
いとみんながやれるとなってしまう

OT はこの過程を大事にしている

秋から冬にかけて東京都の作業療法はこれです！という一言を考えていく必要性にかられてい
る

上松氏 どういうところでそれを感じた？

通所リハに携わる方が MTDLP を受講しているが、行為を分析していく過程が理解しにくいと
いう話も聞いたことがある。

そういうときに学校で土台として必要なものはなんなのだろうか？

三沢氏 OT っていいですねといわれることがあった

生活を絶対外さない。そこに最終的に持っていくという視点を持っている。

小檜山氏 生活のためにということが大事

ただやれと言われてる感じ

生活の話を手際よくわかりやすくするようにしている

三沢氏 地域の方は乗ってきやすい。

小檜山氏 病院の中でもこのような考えで行わなければいけないのではないかと

どこの期でも考えていくべきなのではないか。

三沢氏 多摩丘陵病院でもやっている。

本人にとってレベルの高い主訴があった場合は、MTDLP を使って目標を再設定出来るという経験があった

実際の行動レベルに落とし込めるのがいいのではないかと

このツールは話すきっかけを作ることができるかもしれない

上松氏 視覚化されているのがいい

三沢氏 入院時の訪問指導（居宅へ）をやっている

それだけでも変わってきている。それに MTDLP が加わることでイメージがしやすくなっている

200点で行っている。2、3時間とられるから赤字だがやる意味を感じている。

他のところではほとんどやっていないのではないかと

上松氏 連携を考えたときに色々な側面があるか？

授業の中でどんな風に入れ込んでいくか？

小檜山氏 一人で行くことが多い。こまめに連絡するようにはしている

以上